社会言語科学　第7巻第2号
2005年3月　78-87ページ

The Japanese Journal of Language in Society,
Vol. 7 No. 2 March 2005, pp. 78-87

研究論文

日英のターン交替と相づち使用の実相
― 日本人学生とニュージーランド学生の比較を通して ―

大浜るい子（広島大学大学院教育学研究科）
西村　史子（ワイカト大学東アジア学科）

本稿は，日本語と英語会話の相づちの出現頻度及び出現実態をターン交替との関わりで調べ，両言語における相づち行動の共通点と相違点を明らかにするものである．資料には日本語母語話者，及びニュージーランド（以下NZ）英語母語話者による2人1組のロールプレイ会話が使用された．先行研究に違わず，日本資料でより多くの相づちが観察された．これらは，移行適切場に現れる会話参与者間の相づちの応酬と，移行適切場ではないターン途中での合の手的相づちの2つに分けられた．前者は日本語のターン取得の先延ばし傾向を示すものである．これらの相づちはNZ資料ではほとんど見られず，この相違が最終的に日本資料での相づちの高頻度を形成すると結論付けられた．これらを除くと，相づち及びターン交替の実態は両資料でほぼ同じであった．すなわち，同じような頻度でターンが交替され，かつターン冒頭では相づちが同程度の頻度で用いられることが分かった．

キーワード：相づちの応酬，日本語ターン交替形式，ターン取得先延ばし傾向，ターン途中の相づち，移行適切場

Turn-allocation and backchannels in Japanese and English conversation:
— A comparison between Japanese and New Zealand students —

Ruiko OHAMA (Hiroshima University Graduate School of Education)
Fumiko NISHIMURA (The University of Waikato, Department of East Asian Studies)

This paper analyzes the use and frequency of backchannels, in Japanese and English, in terms of their relationship with turn-allocation. The data consists of role-play conversations by native speakers of Japanese and of New Zealander (NZ) English. A higher frequency of backchannels was observed in the Japanese data in comparison to that of New Zealander English. Backchannels in Japanese occurred at two different locations in conversation; Transition Relevance Places (TRP) and non-TRP's. An exchange of backchannels was often observed at TRP throughout the Japanese data, which indicates the tendency in Japanese to postpone taking turns. Apart from these findings, both languages were found to behave similarly in terms of turn-taking and backchannels. Contrary to common assumption, New Zealanders use backchannels just as often as Japanese at the beginning of turns.

Key words : backchannel exchange, 7 types of turns, tendency to postpone turn-taking, backchannels, non-TRP, Transition Relevance Place (TRP)

1. はじめに

日本語は他言語に比べて相づちの頻度が高く，また表現種類も多いといわれている（White, 1986; Miller, 1991; Clancy, Thompson, Suzuki & Tao, 1996）．それだけに，相づちが日本語会話の中で果たす役割は大きいと思われるが，他言語と比較して，相づちの何がどのように異なり，日本語会話のどのような特徴を作り出すことに貢献しているのかといったことは未だ十分に明らかになっていない．

本研究では，日本語と英語の会話資料を分析し，それぞれの言語における相づち行動の違いはターン

交替の仕方，言い換えれば会話の進め方の違いによるものであることを明らかにする．以下ではまず，本研究における相づちとターン交替の定義を明確にした上で，日英の資料の相づち頻度とターン交替の頻度を調査し，次に両者の生起分布の特徴を明らかにする．そしてそこから，日本語ではどのような会話の進め方が好まれるのか，相づちが高頻度に生起するのはなぜなのかを考える．また相づちについては，日本語での頻度の高さばかりが注目されがちであるが，本研究では日本語と英語の相違点に加え，共通点も示していきたい．

2. 本稿における相づちの定義

本稿で取り上げる相づちをその表現から定義すると，(1)「うん，あー，ええ」などのいわゆる相づち詞，(2) それに類する「なるほど」，「そうですね」，「本当」等の語，(3) 相手の発話の全部あるいは一部分の「繰り返し」，(4)「言い換え」，そして (5) 相手の発話を途中から引き受ける「文完成」ということができる．これら (1) ～ (5) の表現を相づちと見なすことは研究者間でほぼ合意されている (Duncan & Fiske, 1977; White, 1986 ; 堀口，1988 参照) ので，紙幅の都合上ここでは詳しい議論は省くことにする．しかし，同じ表現であってもその出現位置によって相づちとして採用する研究者と相づちとは見なさない研究者がいる．本稿では，(1) ～ (5) の表現で以下の (Ⅰ) ～ (Ⅳ) の条件を満たすものは全て相づちと見なす立場を取る．

(Ⅰ) 話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る表現
(Ⅱ) 相づちに対する相づちと言えるもの
(Ⅲ) 少し間をおいて取られたターンの開始時に現れる表現
(Ⅳ) 質問に応じる形で現れた「はい，ええ，うん」など

(Ⅰ) はメイナード (1993: 58) の定義であるが，この条件は多くの研究者によって採用されているものであり (Yngve, 1970; White, 1986; Clancy et al., 1996 ; 小宮，1986 など)，この範囲に含まれる表現を相づちとすることについては研究者間でほぼ一致している．この定義は，「話し手の発話権の中」という相づちの打たれる位置と「聞き手」という相づちの使用者によって特徴づけられているが，これは英語圏の backchannel はもとより，日本語の相づちの典型例と言える．(Ⅱ) ～ (Ⅳ) は，先行研究では相づちから除外されることがあるものであるが，本稿では以下に説明する理由により相づちとして取り上げることにする．

(Ⅱ) は Iwasaki (1997) が BBC (back - backchannel) と呼ぶもので，相づちに対して相づちが返される場合を指す．これを相づちとして認めることによって，聞き手が打つものだけではなく，聞き手以外の会話者が打つものも拾い上げることができる．特に日本語の会話では，会話者が実質的な発話をすることなく，相づちのみのやりとり (Iwasaki はループと呼ぶ) を交わすことが多いので，このタイプを除外したのでは日本語の相づち行動を適切に扱うことができない．このタイプは英語では会話の終了を導く「先終了句」(Schegloff & Sacks, 1973 の Pre-closing) としてよく知られた現象であるが，それ以外の場所ではあまり見られないものなので，気づかれにくかったと思われる[1]．しかし，英語と重なる部分だけを観察していたのでは，日本語に特徴的な現象を明らかにすることはできないだろう．

(Ⅲ) は，Clancy et al. (1996) が backchannel のサブタイプとして分類している resumptive opener にあたるものである．このタイプは，メイナード (1993) では「間発話順番状況」内の表現であるとして，相づちから除外されている．間発話順番状況内では話し手や聞き手が同定できないとされているため，この位置のものは (Ⅰ) の「聞き手が送る」という基準を満たさず，相づちとは認められないと考えられている．しかし，直前のターンの終了後に間あるいは沈黙があり，会話に小さな中断ができても resumptive opener により，中断前の発話に直接関連づけることが可能になっている (例 1 の「え」参照)．よって本稿では Clancy et al. (1996) に従い，相づちの一種と見なすことにする[2]．

例1

AJ1：新品ではないんだけどね私が使ってたから

BJ1：　　ああ＝

AJ1：　　うん

BJ1：そうなんだ　　(..)え，いつ

最後に（Ⅳ）だが，質問に対する応答として現れる「はい，うん，ええ」は，相づちとは見なさないとする研究者が多い（小宮，1986；ザトラウスキー，1993；堀口，1997）．しかし，大浜（2004b）によると，「はい，うん，ええ」などが使用される時の疑問文は，質問というより相づち表現の中の「繰り返し」や「言い換え」に近いものであるという．これに従えば，それらに続く「はい，うん，ええ」は質問に対する答というより，既出情報の確認に対する同意に似たものであると言える．

大浜（2004b）は，日本人母語話者による自然会話に現れた585の真偽疑問文とその応答形式を調査し，次のことを明らかにしている．

（イ）真偽疑問文の命題内容が真であることを，真偽疑問文より以前に応答者自身が表明しているか，あるいは応答者の発話内容から推論可能である時，その応答には応答詞のみが使用される傾向にある．

例2[3)]

店員：じゃ，手提げ袋の方おつけしときましょうか？

客：あ，いいです

店員：いいですか？

客：はい

店員の「いいですか？」という質問に客が「はい」と応答詞のみで答えているのは，その前に手提げ袋がほしいかどうかの答を既に客が質問前に表明しているからである．

（ロ）真偽疑問文の命題内容が，応答者がそれ以前に思考することも発話することもなかったものである時は，その応答に応答詞は使用されず，「そうです」のみ，あるいは疑問文の述語の繰り返しのみが使用される傾向にある．この真偽疑問文は会話の冒頭や話題の転換時に多く現れる．

例3〈会話の冒頭で発せられた疑問文〉

客：このイチゴ，甘いですか？

店員：甘いですよ

例4〈会話が途切れた後に発せられた疑問文〉

B：絶対あの頃，手に入れとったら売っぱらったのに

(0.8) ねぇ，よし子，次，音声学なん？

A：そうよ

「イチゴが甘いかどうか」，「次に音声学の授業があるかどうか」はどちらも初出の，いわば突然の質問で，各質問の直後に続く答は質問者にとって新しい情報である．このような場合，応答詞による答は使用されない傾向にある．

本稿にとって重要な指摘は，（ロ）のタイプの真偽疑問文に「はい，うん，ええ」などが使用されにくいということ，真偽疑問文に応答詞が現れているように見える場合は，その前に既に答が現れていて，その応答詞は機能的には既出の情報を確認するような，いわば相づち的なものであるということである．これを踏まえて，本稿では（Ⅳ）の「はい，ええ，うん」などを相づちとすることにする．

なお，例2の店員の「いいですか？」に見るような，会話相手の発話内容の繰り返しや言い換えを相づちと見るか，実質的な確認や同意を求める質問と見るかは議論のあるところである．ザトラウスキー（1993）は，繰り返しや言い替えの元になった語との距離とイントネーションによって見分けることを提案しているが，自身の資料はその通りに分類されていないだけではなく，その基準に照らせば，相づちと認められる繰り返しや言い替えが数多くあったにも関わらず，ザトラウスキーは資料中には見られなかったとし，全てを実質的発話（＝質問）としている（ザトラウスキー，1993: 84）．先にIwasaki（1997）のループで見たように，相づちのみのやりとりは，日本語に特に多い．そのような連鎖に親しみがない英語圏の研究者には，相づちに似た繰り返しや言い替えも実質的発話として解釈する傾向にあるのではないかと思われる．また，上昇イントネーションが疑問文であることを保証しないことは多くの研究で明らかにされていることである（吉沢，1960；宮地，1963；須藤・岡田・西山，1996）．以

上より大浜（2004b）で「はい，うん，ええ」などを誘発する疑問文といわれるものも，本稿では相づちと見なす．よって例2の「いいですか？」，「はい」は相づちの連鎖ということになる．

以上述べたように，本稿では表現の種類としては（1）～（5）にあてはまるものを，そして出現位置については（Ⅰ）～（Ⅳ）にあてはまるものを相づちと定義する．

3. ターン交替形式

では次に，ターン交替のメカニズムについて述べる．改めて言うまでもなく，会話とは2人以上の会話参与者が代わる代わる交替しながら発言するという言語形態である（レビンソン，1990: 35）．実際の会話では複数の会話参与者が同時に発話したり，また話者交替のタイミングが合わずに間ができたりすることもあるが，それらは通常ごく短い時間であることが分かっており，話者交替はおおむねスムーズに行われる．それは，話者交替に関して何らかのルールが存在し，会話参与者がそれを周知しているからこそ達成される現象であると言える．このルールについては，Sacks, Schegloff, & Jefferson（1974）が提案している以下のモデルが有名である．

（a）もし現在の話し手が次の話し手を選択すれば，現在の話し手は話すのをやめ，次の話し手が移行適切場（Transition Relevance Place，通称TRP）で次の発話順番を取得する．この時，次の話し手に話す義務が生じる（＝他者選択）．

（b）もし現在の話し手が次の話し手を選択しなかったら，誰であれ最初に話し始めた人物が発言の権利を得る（＝自己選択）．

（c）もし現在の話し手が次の話し手を選択せず，また他の会話参加者による自己選択も起こらない場合，現在の話し手は話し続けてもよい．しかしその義務はない（＝再保持[4]）．

相づちとターン交替の間に何らかの関係があるということは，多くの研究者が考えていることで，相づちがターン交替と関係づけられ議論されることは多い．しかし，これまでの先行研究はSacks et al.（1974）のモデルをそのまま利用しており，モデル自体の妥当性が議論されることはあまりなかった．しかし，そもそもSacks et al.（1974）のモデルは英語の会話資料に基づいて導き出されたものであり，英語以外の言語の分析に利用する際には慎重でなければならない．グウィの会話を分析した菅原（1996）や日韓の会話分析をした金（2000）は，そのような枠組みでは，たとえ他言語に固有な現象が存在したとしても「概念枠そのものがもっている限界によって覆いかくされ」（菅原，1996: 258），「枠にはまったパラダイムを検証するだけ」（金，2000: 89）に終わってしまうと警告している．

本研究で収集された日本語会話には，上記（a）（b）（c）のどれにもあてはまらないケースが多く観察された．それは例えば，例5に見るように，現在の話し手がターンを終えても会話の相手がターンを取ろうとしない（本稿では取得放棄と呼ばれる），現在の話し手も話し続けようとしない（同様に取得再放棄），さらにその後でも会話の相手がターンを取得しようとしない（同様に取得再放棄）といった場合のように，会話参与者の間でしばらく相づちの応酬が続くような場合である．

例5

BN6：お（.）もう大変よ：引越：俺今度するじゃん

AN6：あ：あ 取得放棄　そう言っとたね 取得再放棄

BN6：　うん 取得再放棄　あのさ：何か＝

BN6：レンジがね余るんよ 最終自己選択

このような相づちの応酬は，Iwasaki（1997）でタイ語や英語と比較して，日本語に多く現れたことから，日本語の会話に特徴的な現象であることが示唆されているものである[5]．ターン交替のあり方と相づちの関係を明らかにするためには，このような現象を拾い上げられる枠組みが是非とも必要である．そこで本稿では，話者交替が実現するまでの全プロセスを組み込んだ修正モデルを提案する．このモデルは，Sacks et al.（1974）のモデルに取得放棄，取得再放棄，最終自己選択，及び割り込みという範

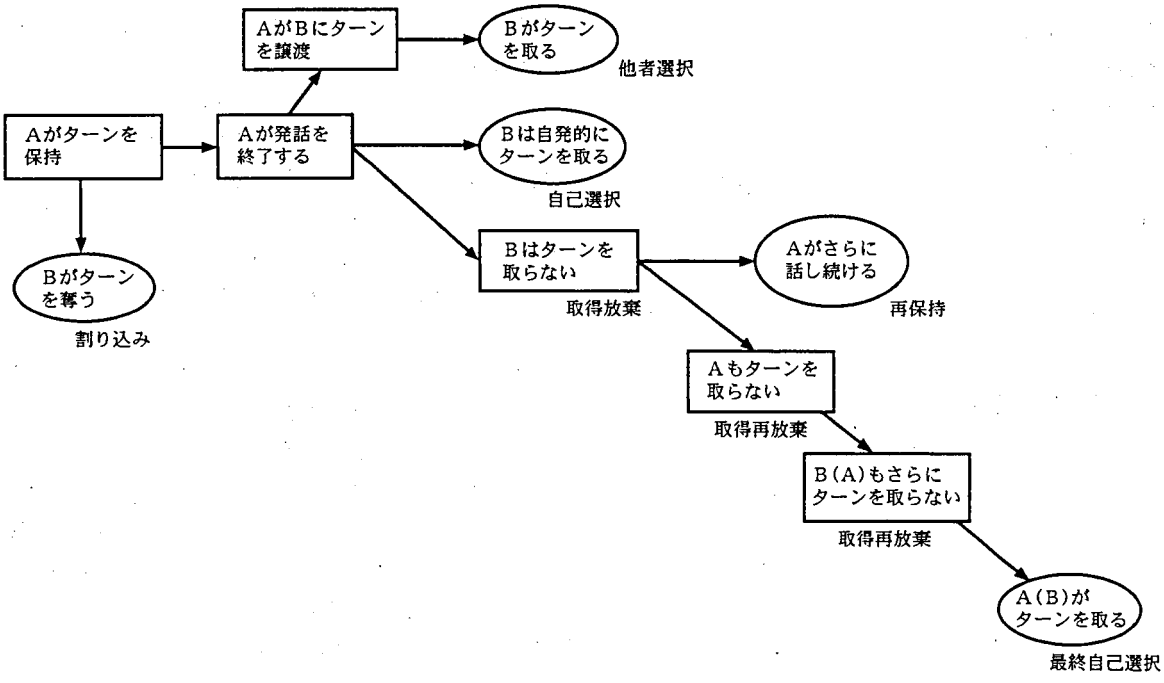

図1　ターン交替7形式によるターン移行のメカニズム

疇を加えたものである（図1及び例5参照）．なお，割り込みというのはその名の通り，誰かが話している途中で無理矢理話し始めるもので，Sacks et al.（1974）が既に逸脱の例としてあげているものを取り込んだものである（例6，7参照）．

例6（AがBの誘いを断ろうとしている）

AJ9：でもね私ね

BJ9：　　だってAが行かなかったら私1人よ＝

BJ9：ちょっと寂しいじゃ：ん　割り込み

例7

AN10: Oh yeah, but he's like (.) unreachable can＝

AN10: I just　　[Do you wanna just＝

BN10：　　Well I'll give [you his telephone＝

AN10: go now] I want this tonight　割り込み

BN10: number]　割り込み

---

4. 資料の概要

以上の相づち，ターン交替形式の定義，枠組みを用いて会話資料を分析する．分析に用いる会話資料には，以下の要領で得た勧誘と断り[6]からなるロールプレイ会話を使用する．資料収集にロールプレイ方式を採用したのは，日本語と英語各々で同状況の下に生じた会話を収集し，会話の種類による相づちの頻度や表現が異なることを避けるためである．

資料収集にあたっては，日本及びニュージーランド（以下NZ）の大学で，学部生，大学院生を対象に2人1組の友人同士の資料提供者を募った．総計40名の協力を得，30件の日本語会話と29件の英語会話が収集された．なお，英語の方は1会話のみ録音機器不調のため29件の採取となった．収集は2002年から2003年にかけて行なわれた．資料提供者が与えられた役割は，(1) 居酒屋へ誘う／それを断る，(2) 中古の電子レンジを売ろうとする／それを断る，(3) 合コンへの参加を頼む／それを断るというものであった．

録音された会話は全て書き起こしされた．日本資

料は本文執筆者によって行なわれた．NZ 資料はまず書き起こしを本職とする英語母語話者に依頼し，それを元にその後本文執筆者が 2 度目の書き起こし作業を行なった．これは通常の議事録作成等を目的とした書き起こしでは軽視，無視されがちな相づちやポーズ等を確実に拾うための作業で，適宜修正，加筆が行なわれた．なお，両資料の書き起こしに際しては，Schiffrin (1994) の手法を参照した．資料中の相づちの認定作業は，両執筆者間で 2 に示した定義を明確にした後，個別に（Ⅰ）～（Ⅳ）に相当する (1) ～ (5) の表現を全て拾い，会話の中の生起位置によってどのターン交替形式に該当するかを認定していき，その後つき合わせ作業をした．ほとんどの場合一致を見たが，意見が分かれた部分に関してはその都度議論を経て，合意に達した．

5. 結果と考察

表 1 は，2，3 で示した相づちの定義とターン交替 7 形式の基準に従い，会話中に現れた相づちとターン交替形式を数え上げ，その総数と単位時間（1 分）あたりの数を国別にまとめたものである．これを見ると，日本の会話は平均してターン交替形式数で NZ の約 1.3 倍，相づち数で約 1.7 倍であることが分かる．相づち数については，多くの先行研究が明らかにしている通り，ここでも日本の方が高頻度で打たれることが確認された[7]．ここに集計された相づちには，各ターン交替形式の冒頭に現れるものとターンの途中に現れるものが含まれている．以下ではそれぞれ 5.2，5.3 で別に取り上げる．

表 1　ターン交替形式及び相づちの数

	日本	NZ
会話総時間	49 分 02 秒	36 分 41 秒
ターン交替形式総数	1135	658
1 分毎ターン交替形式数	23.1	17.9
相づち総数	1280	578
1 分毎相づち数	26.1	15.8

5.1　ターン交替形式の使用傾向について

ターン交替形式総数は表 1 に示した通りであるが，表 2 はそれを各形式別に整理し，その全体に占める割合を日本と NZ で比較したものである．なお，表 2 の最下段に NZ 資料の総会話時間数を日本資料のそれと同じにした場合の数値をあげている．

表 2 を見ると，日本でも NZ でもターン交替の 7 形式は決して平等に選択されるものではなく，選択される割合は形式によって異なることが分かる．また各形式の使用割合を見ると，日本と NZ で違いが認められる．二国間で χ^2 検定をしたところ有意差が認められ，日本では取得放棄，取得再放棄，最終自己選択が，NZ では自己選択，他者選択がより多く使用される傾向にあることが分かった（$df=6$，$\chi^2=35.926$，$p<.001$）．

しかしここで，NZ の会話時間を日本のそれと同時間に換算したものと比較すると，興味深いことが見てとれる（表 2 の最下段参照）．すなわち，日本側に多いと見られた取得放棄，取得再放棄，最終自己選択は依然として多いが，他のターン交替形式は日本と NZ でほぼ同程度使用されていることが分かる．特に NZ に多いと思われた自己選択と他者選択が日本でも同程度であることは注目される．これは，

表 2　ターン交替形式の形式別出現数

	ターン交替形式							合　計
	再保持	割り込み	最終自己選択	自己選択	取得放棄	取得再放棄	他者選択	
日本 (49 分 02 秒)	157 (13.8%)	45 (4.0%)	101 (8.9%)	268 (23.6%)	286 (25.2%)	127 (11.2%)	151 (13.3%)	1135 (100%)
NZ (36 分 41 秒)	98 (14.9%)	24 (3.6%)	29 (4.4%)	207 (31.5%)	135 (20.5%)	50 (7.6%)	115 (17.5%)	658 (100%)
NZ (49 分 02 秒)	131	32	39	277	180	67	154	880

表3　TRPで話者交替へ至る4プロセス間の出現比

	日本	NZ
他者選択	1.5	3.9
自己選択	2.7	7.1
取得放棄→再保持	1.6	3.4
取得放棄→取得再放棄→最終自己選択	1.0	1.0

日本もNZも基本的には同様なターン交替形式を同程度に使用しながら会話をするが，日本ではさらに取得放棄，取得再放棄，最終自己選択を付け加える形で使用するということである．先の図1を見れば分かるように，取得放棄が行なわれた後に実現可能な再保持も日本とNZで同程度であるので，両国の差異は，例5に示したような〈取得放棄→取得再放棄→最終自己選択〉という連鎖が日本側に頻繁に起こることによることを物語っている．

NZと比較して，この連鎖がどの程度の頻度で出現するかを見るために，移行適切場で話者交替に移行しうる選択可能な4パターンの出現頻度を比較しておこう．表3は〈取得放棄→取得再放棄→最終自己選択〉の出現を1とした時の他の3パターンの出現頻度を国別に示したものである．〈取得放棄→取得再放棄→最終自己選択〉のパターンは，日本では他者選択が1.5回，自己選択が2.7回，そして取得放棄から再保持に至るパターンが1.6回出現する間に1回，NZではそれぞれ3.9回，7.1回，3.4回に1回の割合で出現する計算になる．

5.2　各ターン交替形式別の相づちの出現頻度について

次に，ターン交替形式と相づちの出現頻度[8]の関係を日本とNZで比較する．表4は，ターン交替形式のタイプ別の出現数とその際の相づちの出現数から，各ターン交替形式の相づちの出現率を示したものである．

これを見ると，ターン交替形式のタイプによって相づちの出現率に違いがあることが分かる．取得放棄や取得再放棄のように非常に高い確率で相づちが出現するものと，再保持や割り込みのように比較的低い確率でしか相づちが出現しないものがあり，自己選択と他者選択はその中間あたりである．そして，それは日本とNZで同傾向を示していることも見てとれる．ターン交替形式別の相づちの出現率について二国間で分散分析をしたところ，両国の間に有意差は見られなかった．このことは，日本でもNZでも同じタイプのターン交替形式が使用される時には，同じ程度に相づちが打たれるということを示している．日本とNZで8割以上において相づちが出現している取得放棄と取得再放棄は，どちらもターンの取得を放棄する場合である．ターンを取得するつもりがない時には，日本でもNZでも相づちを打ってそれをシグナルするということができる．また，日本のみならずNZでも，他者選択や自己選択によるターンでは，その過半数において，まず相づちを打ってから発話が始められるという点が興味深い（例8，9参照）．

例8　（BがAに電子レンジを売ろうとしている）

BJ7：（前略）買わん？　　え，ない＝

AJ7：　　（.）か，いや：ええよいや　他者選択

BJ7：言ってたやん　自己選択

表4　各ターン交替形式冒頭における相づち出現頻度

		取得再放棄	取得放棄	他者選択	自己選択	最終自己選択	再保持	割り込み
日本	ターン総数 x	127	286	151	268	101	157	45
	相づち数 y	126	263	109	151	42	44	10
	割合 (y/x) %	99.2	92.0	72.2	56.3	41.6	28.0	22.2
NZ	ターン総数 x	50	135	115	207	29	98	24
	相づち数 y	41	126	75	128	14	30	8
	割合 (y/x) %	82.0	93.3	65.2	61.8	48.3	30.6	33.3

例 9

AN6：(前略) Haven't caught up with for a while

BN6：No. How's things 自己選択

AN6：　　Oh oh it's been so busy 他者選択

5.3 ターン途中の相づち

相づちの中には，ターン交替形式には関わらず，会話の相手が発話している途中に打たれるものがある．ここではそれを「ターン途中の相づち」と呼ぶ．このタイプの相づちはNZでは33件，日本では270件，1分間あたりにするとNZで0.9回，日本語では5.5回となり，日本ではNZの約6.1倍の使用が見られた．このタイプの相づちは，特に日本語の会話に多いもので，早くから外国人にとって違和感のあるものとして認識されていた（水谷，1993; Miller, 1991）が，ここでもそれを裏づける結果が得られた（例10参照）．

例 10

AJ8：何かさ：　　今度引越すことになって＝

BJ8：　　うん

AJ8：からね：　　何か（後略）

BJ8：　　うん

---

6. まとめ

以上，日本とNZでは話者交替の仕方について差異があることが分かった．すなわち，移行適切場での話者交替を同時間内で比較すると，他者選択，自己選択，再保持はほぼ同程度に行なわれるが，その間に挿入される〈取得放棄→取得再放棄→最終自己選択〉という連鎖が日本に高頻度に出現し（表3参照），日本ではNZに比べてターン取得の機会があってもすぐに取得しない，つまりターン取得を先延ばしにする傾向があることが分かった．

また，先行研究に違わず，本資料でもNZに比べて日本の方に相づちが多いことが確認された．その理由の一つとして，上記の連鎖の使用傾向が関わっている．各ターン交替形式の相づち出現率が日本とNZで同程度であったことから（5.2参照），同種のターン交替形式を同程度数に使用している限り，相づちの出現数も同程度になるはずであるが，日本側にのみそれらに加える形で上記の連鎖が見られたため（5.1参照），その分だけ相づち数が多くなっている．特にその際のターン交替形式に，相づちの出現率が高い取得放棄と取得再放棄が含まれているため，その増加分がそのまま相づち数の増加になっているというわけである．日本の方に相づちが多くなるもう一つの理由として，NZではごくわずかしか使用されないターン途中の相づちが日本の会話では非常に多く使用されるという点があげられる（5.3参照）．これら2種の相づちが日本語の相づち頻度の高さを作り出しているわけだが，ターン取得の先延ばしに利用される相づちとターン途中に現れる相づちの機能は別種のものなのか，あるいは何か共通点があるのか，それについては今後の課題である．

上述したように，日本とNZの間には差異も見られたが，共通点があったことも強調したい．繰り返しになるが，各ターン交替形式の相づちの出現率が同程度であったことである．とりわけ日本でもNZでも，自己選択，他者選択では過半数以上においてまず相づちを打ってから話し始めることが分かった．例えば日本語教育では「いきなり話を始めず相手の話に相づち（例えば「そうですね」等）を打ってから話し始めるのが望ましい」と指導することがあるが，この話し方は実は日本語だけのものではない，ということである．NZ資料でも見られた「True. Um coz I am liking（後略）」といった日本語の特徴と思われがちな話し方が決して例外ではなく，英語においても日本語と同じ割合で現れることが分かったのである．

この結果は異文化間比較の観点で興味深いというだけでなく，外国語教育現場への母語の知識の応用の可能性を示しているという点でも注目に値しよう．すなわち，英語話者が学習者である日本語教育現場，また日本語話者が学習者である英語教育現場での会

話指導に，母語の言語習慣に気づかせることの有用性を示唆しているということである．

〔書き起こしに用いた記号〕

(.)　非常に短い間

(0.8)　0.8秒の間

:　延ばす音

[ ]　二者の発話の重複

?　上昇イントネーション

=　次行へ続く

注

1) Duncan & Fiske (1977: 178) では，このような現象は理論的には考えられるが，彼等の資料には見つからなかったことが指摘されている．また，Iwasaki (1997) の調査によると，日本語会話には75ものループが出現したのに対し，英語では10個，タイ語では2個しか見られなかったということである．
2) Clancy et al. (1996) が resumptive opener を相づちとして採用した背景には，分析した会話資料が，英語，日本語，中国語のものであったことが関わっているのではないだろうか．特に日本語の資料を適切にとらえようとすれば，英語圏の条件をそのまま使用するだけでは十分ではない．
3) 例2〜4は大浜 (2004b) の例を引用したもので，それ以外は後に4で述べる資料より引用．
4) 再保持というのは，以下に出てくる取得放棄，取得再放棄，最終自己選択と共に本研究における命名．概念としては既に Sacks et al. (1974) で言及されている．
5) 日本語母語話者による自然会話を日本語学習者による自然会話と比較分析した大浜 (2000) でも，日本語母語話者によるインタビュー会話を分析した大浜 (2004a) でも，Sacks et al. (1974) の枠組みでは網羅できない現象が多く観察されている．
6) 本資料は，断りの際の表現形式を比較するという他目的の研究にも使用することが意図されている．
7) ターン交替形式数については調査されたものがほとんどなく，ここでの結果から即座に日本の方が多いと結論づけていいかどうか分からない．金 (2000) に日本の方が韓国より多いことが報告されているが，認定基準が異なり直接比較することはできない．
8) 単独の相づちも，連続した複数の相づちも1回の出現と数えた．

引用文献

Clancy, Patricia M., Thompson, Sandra A., Suzuki, Ryoko and Tao, Hongyin 1996 The conversational use of reactive tokens in English, Japanese and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, **26**, 355-387.

Duncan, Starkey and Fiske, Donald 1977 *Face-to-face interaction: Research, method and theory*. Newyork: Willy.

堀口純子　1988　コミュニケーションにおける聞き手の言語行動　日本語教育，**64**，13-26.

堀口純子　1997　日本語教育と会話分析　くろしお出版

Iwasaki, Shotaro 1997 The Northridge earthquake conversations: The floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, **28**, 661-693.

金志宣　2000　turn及びturn-takingのカテゴリー化の試み－韓日の対照会話分析－　日本語教育，**105**，81-90.

小宮千鶴子　1986　相づち使用の実態－出現傾向とその周辺－　語学教育研究論叢　3　大東文化大学語学教育研究所　Pp.43-62.

レビンソンS.C.　安井稔・奥田夏子（訳）　1990　英語語用論　研究社出版（Levinson, Stephan C. 1983 *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.）

メイナード，K. 泉子　1993　会話分析　くろしお出版

Miller, Laura 1991 Verbal listening behavior in conversations between Japanese and Americans. In J. Blommaert, and J. Verschueren (Eds.) *The pragmatics of international and intercultural communication*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. Pp.111-130.

宮地　裕　1963　話しことばの文型 (2)－独話資料による研究－　国立国語研究所報告 23　秀英出版　Pp. 178-208.

水谷信子　1993「共話」から「対話」へ　日本語学，**12**，4-11.

大浜るい子　2000　日本語のターン交替とあいづち　－母語話者と学習者の比較をとおして－　広島大学教育学部紀要第二部，**49**，153-161.

大浜るい子　2004a　日本語教育における相づち指導のための提案―相づち頻度の目安について―　平成15年度広島大学大学院教育学研究科リサーチオフィス研究成果報告書　国際化情報社会における日本語教師養成システムの開発研究　Pp.79-193.

大浜るい子　2004b　日本語の自然会話における真偽疑問文と応答詞「はい」の関係について　日本語教育，**123**，37-45.

Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel and Jefferson, Gail 1974 A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, **50**, 696-735.

Schegloff, Emanuel and Sacks, Harvey 1973 Opening up closings. *Semiotica*, **8**, 289-382. ［北沢裕・西坂仰（訳）1989 日常性の解剖学　マルジュ社　Pp.177-241.］

Schiffrin, Deborah 1994 *Approaches to discourse.* Cambridge: Blackwell.

菅原和孝　1996　ひとつの声で語ること－身体とことばの「同時性」をめぐって－　菅原和孝・野村雅一（編）コミュニケーションとしての身体　大修館書店　Pp.246-287.

須藤路子・岡田光弘・西山佑司　1996　終助詞「か」の文脈依存的意味解釈と音響特性　1996 年日本音声学会全国大会予稿集　Pp.47-52.

White, Sheida 1986 *Functions of backchannels in English: A cross-cultural analysis of Americans and Japanese.* Unpublished doctoral dissertation, Georgetown University.

Yngve, Victor H. 1970 On getting a word in edgewise. *Papers from the sixth regional meeting of the Chicago Linguistics Society*, **6**, 567-578.

吉沢典男　1960　イントネーション　話しことばの文型（1）－対話資料による研究－　国立国語研究所報告 18　秀英出版　Pp.249-289.

ザトラウスキー，ポリー　1993　日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－　くろしお出版

（2004 年　7 月 23 日受付）
（2004 年 12 月 23 日修正版受付）
（2005 年　1 月 28 日掲載決定）